

2027年国際園芸博覧会 プレイベント・サステナビリティレポート (概要版)

2026年9月

公益社団法人2027年国際園芸博覧会協会

プレイベント・サステナビリティレポート 概要

「プレイベント・サステナビリティレポート」は、2027年国際園芸博覧会（略称「GREEN×EXPO 2027」）の事務局である公益社団法人2027年国際園芸博覧会協会が、国際園芸家協会（以下、「AIPH」）に報告する予定である以下の3つのサステナビリティレポートのうち、1つ目のレポートである。

2026

2027

2030

プレイベント・サステナビリティレポート

建設工事と準備段階に焦点を当てた報告書（開会6か月前までに発行）

ポストイベント・サステナビリティレポート

サステナビリティ及びレガシーレポート

目次	概要
1. 本博覧会について	本博覧会の趣旨、テーマ、準備状況などについて記載
2. サステナビリティ	サステナビリティ方針、サステナビリティの歩み、サステナビリティ基本方針と目的・目標などについて記載
3. 持続可能な開発目標（SDGs）への貢献	SDGsへの貢献、SDGs目標の達成方法について記載

1 本博覧会について

■ 本博覧会の趣旨

本博覧会は、AIPHの承認及びBIE（博覧会国際事務局）の認定を受けて開催する最上位（A1）の国際園芸博覧会であり、花や緑との関わりを通じ、自然と共生した持続可能で幸福感が深まる社会の創造を提案、横浜から明日に向けた友好と平和のメッセージを発信する。

■ 本博覧会のテーマ

本博覧会のテーマ「幸せを創る明日の風景～Scenery of the Future for Happiness～」には、『一人ひとりが心に「幸福感を深める」ための種を自分の意志で蒔き、これを人や環境との関わりの中で育み、生命力にあふれ、個性豊かに、多彩な花を咲かせること、それが豊かさを深める社会の風景である』という思いが込められている。

テーマ 幸せを創る明日の風景

～ Scenery of the Future for Happiness ～

サブテーマ

自然との調和

新産業の創出

緑や農による
共存

連携による
解決

1 本博覧会について

■ 本博覧会の概要

名 称	2027年国際園芸博覧会 (International Horticultural Expo 2027, Yokohama, Japan)
正 式 略 称	GREEN×EXPO 2027 (グリーンエクスポニーゼロニーナナ)
開 催 場 所	神奈川県横浜市
開 催 期 間	2027年3月19日(金)～ 2027年9月26日(日) 192日間
テ ー マ	幸せを創る明日の風景 ～Scenery of the Future for Happiness～
博覧会区域	約100ha(内、会場区域80ha)
ク ラ ス	A1(最上位) クラス(AIPH承認 + BIE認定)
有料来場者数	1,000万人以上
公式サイト	https://expo2027yokohama.or.jp/



公式マスコットキャラクター
「トゥンクトゥンク」

1 本博覧会について

■ 本博覧会の準備状況

本博覧会のサステナビリティの実現に向けては、本協会自らが先頭に立ち、率先して行動する。さらに、運営に関わる多くのサプライヤーやサプライチェーン等に対しても、持続可能性に配慮した調達コードや運営に関するガイドラインの遵守を呼びかけ、本博覧会に関わる全てのステークホルダーが一体となって取り組む。

本博覧会は、国と国際機関の公式参加による庭園や花き等の展示・コンペティションを中核とした事業を展開するとともに、本博覧会のテーマの実現に向けて民間企業や自治体、市民等の多様な主体の積極的な参加を推進している。



2 サステナビリティ

■ 本博覧会の開催意義とサステナビリティ

本博覧会は、昨今重要視されている気候変動や生物多様性の損失等の地球規模課題を踏まえ、我が国が培った価値を再評価し、持続可能な社会の形成に活用していくことを目的としている。

本博覧会が開催される2027年は、SDGsの目標達成年度の2030年が目前であると同時に、その先のポストSDGsの議論が本格的に開始される年とされている。これらの流れの中で、2025年に開催された大阪・関西万博のレガシーを継承し、ポストSDGsに向けたメッセージを発信していく。

■ サステナビリティの歩み

	方針等	策定期期
①	サステナビリティ戦略	2024年3月
②	サステナビリティ実施計画	
③	サステナビリティ教育計画	2025年3月
④	サステナビリティコミュニケーション・エンゲージメント計画	
⑤	資源循環の考え方	

2 サステナビリティ

■ 持続可能性有識者委員会

サステナビリティの取組推進に当たり、2023年10月から関連分野の有識者によって構成される持続可能性有識者委員会を設置し、原則として年2回開催している。同委員会では、幅広く複雑に絡み合うサステナビリティの取組に対して、専門的視点から意見や提案等が審議、検討され、協会の計画や取組に反映されている。

■ ESMSの構築とISO 20121認証取得

ESMS（イベントサステナビリティ・マネジメントシステム）とは、イベントにおける目標を達成するため、環境・社会・経済への影響を統合的に管理し、計画・実行・評価・改善（PDCA）のプロセスを通じて適切に運用するための仕組みである。

本協会は、持続可能なイベント運営の国際規格である「ISO 20121:2024」の認証を、2026年6月に取得した。



認証書授与

2 サステナビリティ

■サステナビリティ基本方針と目的・目標

サステナビリティ戦略では、AIPHの規則等に基づき、基本方針、5つの目的及び12の目標を設定し、これらの目的・目標に対応する重要業績評価指標（KPI）を設定し、毎年度、進捗管理を行うこととしている。

なお、目的・目標は相互に関係しているため、取組間のトレードオフを最小化し、相乗効果を生むような取組を推進する。

基本方針	1 人権、2 労働、3 腐敗防止、4 ダイバーシティ & インクルージョン、 5 アクセシビリティ、6 環境
5つの目的	1 気候変動対策、2 生物多様性の保全、3 サステナブルな調達と資源 管理、4 公平性と包摂性、5 サステナビリティ教育と意識向上
12の目標	1 生物多様性、2 水環境、3 脱炭素、4 エネルギー、5 公害対策、 6 廃棄物と解体、7 建設、8 デザイン・計画、9 交通・会場内移動、 10 海外からの参加者、11 サステナブルなイベント運営、12 レガシー

2 サステナビリティ ①気候変動対策

主な取組内容

再生可能エネルギー100%の電力調達等を推進中

会場の電気は、再生可能エネルギー100%かつ県内で発電された電気を使用し地産地消を推進する等、可能な限り環境に配慮した取組を進めている。

暑さ対策

本博覧会の開催地の谷戸地形や湧水、既存樹林を活かし、風が抜ける涼やかな環境をつくり出す予定である。会場内には緑陰や水辺に加え、給水スポットや屋内休憩空間も点在し、夏の暑さの中でも安心して過ごせる工夫を行う。

“樹木輸送”プロジェクト「緑配便®」

2026年3月に大阪・関西万博の会場内の樹木を本博覧会の会場に移設する際、共創パートナーと連携し、環境配慮型の樹木配送サービス「緑配便®」により鉄道輸送を実施した。

輸送した樹木は、「モーダルシフトによる脱炭素化」の取組の実証例として、来場者にわかるように明示する。



GREEN × EXPO 2027 ラッピングコンテナ

2 サステナビリティ ②生物多様性の保全

主な取組内容

自然環境を生かした会場計画

本博覧会では、計画地の環境を読み解き、かつて武蔵国と相模国の国境であった尾根地形、南北方向の水の流れ、風の動きや残されている樹木等の自然資本を活かした会場づくりを計画している。

グリーンインフラの実装

本博覧会会場全体では、バイオスウェル（敷地内に降った雨水を集め、地中にゆっくりと浸透させる機能を持つ施設）を導入する予定である。バイオスウェルは、植栽地と土壌を通過することによる水質浄化機能や自然環境が有する多様な機能を活用したグリーンインフラであり、地域の生態系保護や生物多様性の維持につながる。

自然資本の保全

会場にある「相沢川」は、本博覧会会場となる旧上瀬谷通信施設内を流れる相沢川とその沿川にある農地で、自然資本として将来の公園において継承されていく。博覧会で耕作している農地を再現し、田畑のある谷戸景観として博覧会終了後も引き継ぐのは、国内の博覧会として初めてのことである。



相沢川の景観（イメージ）

2 サステナビリティ ③サステナブルな調達と資源管理

主な取組内容

GX House（リユース型建築）

本博覧会の会場内の仮設建築物は、リース品やリサイクル可能な素材等を積極的に使用し、素材の調達から建設・運用・撤去・再利用まで廃棄ゼロを目指す循環型の「GREEN サーキュラー建築」とする。

この「GREEN サーキュラー建築」を実装するための取組として、当協会では「GX House」（リユース型建築）代行サービスを開始し、本サービスの提供者として「GX House サプライヤー」を10社認定した。

花・緑の循環

本博覧会では、植え替え後の植物等について来場者への花苗の配布や、公共施設での再利用を行うほか、会期中に発生する植物の残さを堆肥化し、会期後に続く地域のバイオマス資源の循環を推進する。



「着る循環」社会実証プロジェクト

共創パートナー「Team P-FACTS（チーム・ピーファクト）」との連携により、1万人を超えるボランティア、運営スタッフ等のユニフォームを“Plant-First（植物由来）”の素材で統一し、「着用→回収→堆肥化→資源循環」までを見据えた実証（PoC）を、来場者の目の前で“見える体験”として展開する。



アテンダントスタッフ・ボランティアユニフォーム

2 サステナビリティ ④公平性と包摂性

主な取組内容

アクセシビリティの実装

2026年4月に、本協会内の指針として「アクセシビリティ実装計画」を策定した。本博覧会を訪れる全ての人々が本博覧会の特徴である花・緑とふれあい、かつ、さまざまな出展や活動も楽しめるよう、ハード・ソフトが一体となった連続的なアクセシビリティの推進を図る。

労働に関する取組状況

本協会との契約者、出展者等には、契約や出展等を希望する際に「持続可能性の確保に向けた取組状況について（チェックシート）」の提出を求めている。当該チェックシートには、人権や労働に関する項目も含んでおり、国際的人権基準や国際的労働基準等の遵守・尊重を義務付けている。

「ダブルアイ」プロジェクト

本協会では、女性活躍・ジェンダー平等推進の取組として、「Inclusion（包摂）」を、一人ひとりが自分ごと「（私）」として捉えることを目指す「ダブルアイ」プロジェクトを実施している。

2026年3月に、本博覧会開催1年前と国際女性デーに合わせたイベントを開催し、大阪・関西万博のレガシーとして、女性のジェンダー平等を本博覧会へ引き継ぐことを発信した。



2 サステナビリティ ⑤サステナビリティ教育と意識向上

主な取組内容

花と緑の共創推進会議

2026年2月に、「第4回GREEN×EXPO 2027 花と緑の共創推進会議」を開催した。本会議では、花と緑の共創推進会議参加団体及び花・緑出展者（298名）が一堂に会し、花・緑出展者10者が屋外・屋内の出展内容を発表した。

教育プログラム コンセプトブック

こどもたちの自ら考える力や想像力を育み、新たな価値観、行動変容のきっかけとなることを目指して、2024年11月にコンセプトブックを公表した。



公式ウェブサイト、SNSの活用



本博覧会は、公式ウェブサイト、Instagram、Facebook、X（旧ツイッター）、YouTube、LinkedInにて情報を発信している。特に、Instagramでは季節の花や横浜の公園、イベントにおけるPR活動の様子等を発信し、フォロワー数は8万人を超えている。

リフィル・サーキュラープロジェクト

本プロジェクトは、博覧会における最大のリスクである酷暑を、「科学・環境・循環」の視点から解決し、次世代の都市運営モデルである「横浜モデル」を世界に発信することを目的として、本協会が関係組織と連携して立ち上げた。本博覧会終了後までに横浜モデルを発信する予定である。

3 持続可能な開発目標（SDGs）への貢献

■ SDGsへの貢献

本博覧会を「SDGs達成に貢献するとともに、その先の社会も見据えた日本モデルを提示する場」とする。また、博覧会開催後も、さらなる展開として、「環境と共に生きる」知恵・行動を世界に伝播し、SDGs達成やグリーン社会に向けた日本モデルの実現・主流化につなげていく役割を果たすとともに、友好と平和や持続可能なまちづくりの姿を国内外に発信し、第二次世界大戦後の米軍基地跡地の平和的利用の象徴的な先例としていく。

■ 本博覧会サステナビリティ目的とSDGs目標の関係

サステナビリティ目的	SDGs目標
1 気候変動対策	  
2 生物多様性の保全	 
3 サステナブルな調達と資源管理	       
4 公平性と包摂性	    
5 サステナビリティ教育と意識向上	  